

「罪」



昨年三月、米国立公文書館で歴史研究家が、BC級戦犯となった旧日本軍憲兵らの遺書十五通を発見した。本書は、その遺書を遺族へとどけるまでの記者たちの取材記録である。

出征した兵士の死には戦闘で死ぬ『戦死』と『戦病死』、戦犯として処刑される『法務死』があった。十五人の憲兵には共通し、戦争犯罪人の汚名を着せられた死へのうしろめたさがあったに違いないと、ある記者は言う。

「従容トシテ喜ンデ死ニ就イテ逝キマス」
「祖国ノ歴史ニ殉ジテ立派ニ逝キマス」

だが、その後「サレド家名ヲ恥シメテ祖先ニ申訳ナシ 私ノ墓標ハ不要デス 唯父母ノ墓ノ傍ニ桜樹ヲ植エテ私ノ墓標ニ代エテ下サイ」など、旧かな遣いの文章にはどれにも、これに似た複雑な心境が映しだされている。

さらに、裁判での上官の発言は大きく左右した。分隊が独自の判断で行うはずのない作戦を、「命令を出した覚えはない」とした師団

「不合理な戦犯」が残す歴史

長や、「兵士たちは、無条件降伏の報知に激怒し異常精神状態に陥り、最も悪質、凶悪なる犯罪を犯すに至った」と証言した中將もいる。

それにくらべ遺族の側は苦難に満ちていた。ある親は、県が初めて主催した戦没者慰霊祭の会場から「お宅は戦犯だから」と参列を拒否された。「戦犯」という事実が信じられず、生前の人柄を知ってもらおうと、兄と交わした手紙をまとめ、文集を発行した弟もいる。

『罪』があるとすれば、十五人は誰に、どんな罪を犯したのか。被害と加害の両者に同時になるのが戦争だが、絶対に被害者にならぬ者もいたのではないか。不合理な罪人になったとき、初めてその存在に気づく歴史しか持てぬとしたら、それこそ大きな罪である。

先日テレビで世界貿易センタービル跡に何をつくるか特集があった。建築家安藤忠雄は古墳のような丘陵をつくる提言をしていた。地球の一部でもあるその地面に様々な人が集う。また一方に、さらに高く雲を突きさす摩天楼を切望する人たちもいる。再び同じ『罪』が生まれるかもしれぬ営みの循環をどこかで絶たなくては、犠牲者はうかばれない。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）